

三つの充実と人間の三大欲
(スランプ付)

はじめに

さて、今回の『三つの充実と人間の三大欲』（スランプ付）という作品は、今までの「三つの充実と人間の三大欲」に「スランプ、プラトニックラブ、笑い、その他」などを付け加えて、一つに統合したものであるが、その「内容」は、次のようなものである。

まず、「三つの充実」では、今日、われわれ人間にとって、一体、どのように生きることが、最も「幸せ」な生き方であるかという問いに対して、誰もが心の底から納得できるようなものとして、ここでは、いわゆる「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるといふことと、「天職」とは、一体、どのようなものであるかの考察であり、また、「欲と情」では、一体、「欲」の何が問題であり、また、「情」の何が問題となるかの考察であり、そして、「人間の三大欲」では、一般に「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」がまさに「人間の三大欲」とされているが、それに新たな「考え方」を付け加えたものであり、さらに、カフカの「変身」では、その人の見た目が変わるだけで、なぜ、他人の見る目も大きく変わってしまうのかという問題であり、その他、そのような問題の「考察」になっていて、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

一方、「スランプ」では、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきっている超「自我」（「純粹自己」）の状態になって、例えば、何か本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、そこからこそ、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、その他」などが生み出されるといふことであり、また、「プラトニック・ラブ」とは、本来、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「アイデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のアイデア」や「善のアイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、まさに「神的な恋（エロス）」のことであり、また、「笑い」では、なぜ「物まね」は観ていて楽しく、また、「健全な笑い」とは、一体、どのようなものになるのかの考察であり、そして、「友情」とは何か、「自信」とは何か、さらに加えて、「漫画」とは、ワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」を、読む人の「頭の中」で自然とつながり合せて、いわば「映像の流れ」のようにして内容を理解して行くものであり、また、漫画の最大の特徴は、特に「強調したい場面」、あるいは「決定的瞬間」などを、まさに極めて大きな「アップ画面」で、いわば大迫力の「激写」風に表現することであるが、その他、そのような「考察」であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成二十九年十月吉日（統合版）

如月翔悟

目次

- 一、 三つの充実
 - 二、 欲と情
 - 三、 人間の三大欲
 - 四、 子孫保存欲
 - 五、 変身
 - 六、 人間の基本的な欲求
 - 七、 最後に辿りつく地点
- ※ 参考文献

目次

- 一、 スランプ
- 二、 プラトニック・ラブ
- 三、 笑い
- 四、 健全な「笑い」
- 五、 友情
- 六、 自信
- 七、 漫画の魅力

*
*

三つの充実、その他

三つの充実

三つの充実

それでは、ここで「三つの充実」ということについて、少し考えてみたいと思うが、それは、今日、われわれ人間にとって、一体、どのように生きる事が、最も「幸せ」な生き方であるかという問いに対して、誰もが心の底から納得できるようなものとして、ここでは、いわゆる「三つの充実」という考え方を、参考程度に書き留めてみたいと思う。

それは、何も難しいことはないもので、いわゆる「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるということである。——つまり、一つは、「仕事」（社会的な活動）を充実させることである。その場合、もちろん、学生であれば、学校の「勉強」ということになるだろうし、また、専業主婦であれば、家事や育児或いは介護、その他を充実させるということである。そして、もちろん、社会人であれば、その人が従事している職業的な「仕事」を充実させるということである。次に、「生活」を充実させるというのは、主に「各人の家庭（家族）生活」を充実させるということであり、そして、もう一つは、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということになるかと思う。

それでは、その「三つの充実」について、もう少し詳しく考えてみたいと思うが、われわれ人間というのは、非常に「贅沢な存在」であって、それゆえ、ただ「一つの領域」が満たされただけでは、なかなか満足できにくいところがあり、最終的には、「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」によってこそ、初めて、自分の「人生」に対して、心の底からの満足感が得られるようなところがあるということである。

例えば、学生の場合であれば、その人が、いくら学校の「勉強」が得意で、優秀な成績を上げていても、それだけでは、なかなか自分の人生に対して、心の底からの満足感を得られにくいものであり、それに加えて、友だちなどと楽しく遊んだりすることが、必要不可欠であり、そういうことが満たされることによって、初めて心の底からの満足感が得られることになるかと思う。もちろん、その場合、「家庭生活」が、うまくいっていないければ、当然のことながら、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感とは、なかなか得られにくいものである。また、逆に、家庭生活や友だちとの遊びなどには、十分に満足していても、学校の「勉強」の方が思うようになければ、今度は、そのことが「悩みの種」となり、心の底からの満足感とは、なかなか得られにくいものである。

同じように、社会人の場合にも、その人が従事している職業的な「仕事」だけが、いくら充実していても、それだけでは、なかなか「心の底」からの満足感とは、得られにくいものであり、それに加えて、同僚や友だち或いは異性との関係などが、うまくいっていると、楽しい時が得られているということが、必要であり、そのようなことが欠落していると、いくら「仕事」だけが充実していても、やはり「心の底」からの満足感とは、なかなか得られにくいものである。また、その人の家族や夫婦関係その他に何か大きな悩みや揉め事などがあれば、そのことがどうしても、その人の精神的な「緊張」^{ストレス}となつて、心の底からの満足感とは、なかなか得られにくいものである。そのように、ただ「一つの領域」、或いは、「二つの領域」だけが充実していても、もう「一つの領域」が、思うように満たされないこと、どうしても自分の人生に対して、心の底からの満足感とは、なかなか得られにくいものである。それだけわれわれ人間というのは、まさに「贅沢な存在」ということになるのだろう。ただ、ここでいう「三つの充実」というのは、むろん、無制限に欲望をむさぼると

というようなことではなく、その一つ一つの領域を充実させるということである。

それでは、その「三つの充実」という言葉の真意を説明したいと思うが、それは、いわば「物量的な豊かさ」というよりは、むしろ「質量的な豊かさ」ということになるかと思う。それは、一体、どういう「意味合い」かと言えば、それは、次のようになるかと思う。

例えば、この地球上のあらゆる生命体は、何よりも「生きよう」として存在している。それゆえ、われわれ人間も、当然のことながら、何よりも「生きよう」として存在している。そして、われわれ人間が、この世で生きていくためには、どうしても必要最低限の「衣食住」というものが、どうしても必要不可欠になって来る。もちろん、遙か遠い大昔むかしであれば、例えば、狩猟や採集、また、農耕や牧畜などによって、いわゆる「自給自足」ということも、あるいは可能であったかも知れないが、今日のような「貨幣経済」においては、その必要最低限の「衣食住」というものを「確保・維持」するためにも、いわゆる「金銭的な収入」というものが、どうしても必要不可欠になって来るということである。

もちろん、その「金銭的な収入」を得るための方法としては、不法（不正）なものをも含めれば、実にいろいろな方法があるかと思うが、その大きな主軸となっているものは、いわゆる「産業活動に従事する」（つまり「仕事に就く」ということであり、それには、第一次産業（農業、林業、漁業）、第二次産業（鉱業、建設業、製造業）、そして、第三次産業（卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業）、また、公務などがあり、そのいずれかの産業活動か公務活動、その他に従事することによって、いわゆる「収入」を得るという方法である。

つまり、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」ということになるかと思う。もちろん、「収入」などいらぬというならば、それは、いわゆる「ボランティア活動」ということであり、その「労働目的」は、前者とは、はっきりと違ったものになるのである。また、もちろん、その人が「資産家」、その他であれば、何も「仕事」などしなくてもよいのかも知れないが、しかし、それ以外の圧倒的多数の人たちにとって、いわゆる「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのためにこそ、たとえつらく厳しい労働であっても、それにじっと耐え忍びながらも、その「労働に従事する」ということになるのである。

とは言え、もちろん、「仕事」というのは、何も「収入」を得るためだけのものではなく、それに加えて、いわゆる「社会的な活動」に従事するということであり、それは、社会の一員として、何らかの「社会的な活動」を行なうということでもあるわけである。

これは、極めて大事な認識であり、「仕事」というのは、いわゆる「趣味や遊び」などのような「個人的な活動」ではなく、まさに「社会的な活動」であり、それゆえ、「趣味や遊び」などであれば、その人が好きな時に好きなことを好きなように行なえば、それでよいものであり、しかも、その「活動や結果」などに対しても、特に「責任を負うということもない」わけである。ところが、「仕事」というのは、「趣味や遊び」などとははっきりと違って、与えられた業務を「誠実に遂行する」ということが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということであり、その「見返り」として、いわゆる「金銭的な報酬」（つまり収入）が得られるということである。

一、仕事

さて、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」ではあるが、それは、「趣味や遊び」などとははつきりと違っていて、与えられた業務を「誠実に遂行する」ことが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということである。それは、決して気楽なものではないが、しかし、生きるためには、「金銭的な収入」を得ることが、どうしても必要不可欠であり、その「金銭的な収入」を、まさに「仕事」(つまりは「社会的な活動」)によってこそ、得ているということである。

それでは、どのような「仕事」に従事するのが、いちばんよいのかという問題が生じて来るかと思うが、それは、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「最もよいこと」になるのだろう。もちろん、生きるためには、どのような「仕事」でも従事しなければならないものはあるが、できれば、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「理想」であり、それは、言葉を換えれば、いわゆる「天職」を見つけ出すということにもなるのだろう。

それでは、その「天職」というのは、一体、どういうものかと問えば、それは、その人に最も適した「仕事」であり、それゆえ、その仕事に従事しているような時には、その人自身、まさに「最も充実した時」を過ごしているような状態であるということである。そして、その人の「仕事の内容」とともに、その人の「人生」もより深まっていくようなものである。それゆえ、ただ単に「収入が多い」とか、「カッコいい」というようなことではなく、その人の「資質」に最も適したものであるので、その仕事に従事しているような時には、その人は、まさにその人自身になりきって活動している状態であり、それゆえ、まさに「確かな手応えや充実感」などを全身で感じている状態にもなるわけである。

つまり、その人にとって、確かな手応えが全身にしかと伝わって来るようなもの。その人が、時の経つのを忘れるほど、その活動に深く熱中できるようなもの。その人の心にも身体にも熱き「情熱」が満ちあふれて来るようなもの。その人が、我を忘れて、その世界に深く「没頭・没入」できるようなもの。その人の「心の中」で大きな位置を占め、「心の主軸」にもなっているようなもの。その人の「夢やロマン」などを強くかき立て、また、深く充実してくれるようなもの。その人が、多くの時間を降り注いで全力で取り組んでも悔いがないようなもの。その人が、本来の「自分自身」になりきって思いっきり活動できるようなもの。その他、そのように、その人にとって、「……なるほど、これに従事(専念)しているような時こそは、自分は、最も自分らしく生き生きと躍動して生きている。そして、張りつめた空気と精神とのなかで、確かな手応えと充実感を深く味わい、感じている」。そのようなものこそは、まさにその人にとっての「天職」になるということである。

二、生活

では、次に、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)を充実させるということであるが、その場合、「生活」というのは、基本的には、「家族を中心としたもの」になるかと思う。もちろん、それ以外にも、一人暮らしをはじめ、寮生活、入院生活、老人ホーム、

その他の施設での生活、また、避難生活、ホームレス、その地、実にいろいろな場合があるかと思うが、ここでは、主に「家族生活」について、少し考えてみたいと思う。

まず、「家族」というのは、今日では、「核家族、直系家族、複合家族」というような分類の仕方になっているかと思うが、「核家族」というのは、夫婦とその子供からなるものであり、また、「直系家族」というのは、長男など家系を継ぐ子供の家族に親が同居するということであり、そして、「複合家族」というのは、それ以外の家族体系ということになるかと思うが、もちろん、そのような分類が大事なのではなく、いかに「生活」を充実させるかということであり、それは、次のようなものになるかと思う。

例えば、一日の「生活」ということを考えてみると、まず、朝起きて顔を洗い、着替えなどをしては、朝食を食べたあと、子供であれば、学校に、大人であれば、職場へと出かけ、そして、専業主婦であれば、家の掃除や洗たくなどを初めとして、ふとん干しや風呂そうじ、また、買い物に出かけたり、あるいは幼い子供やお年寄りなどがいれば、その育児や世話などをしたり、そして、午後には、学校から子供が帰るとともに、夕方（或いは夜）には、父親も家に帰ってきて、テレビなどを観ながら、多くは一緒に夕食を取ることになるかと思うが、その時が、いわば「一家団らん」の時になるというのが、ふつう一般的な「家庭での生活」ではないかと思う。

例えば、それが核家族であれ、拡大家族（直系家族や複合家族）、あるいは寮などでの生活であれ、その他、何であれ、とにかく、そこで一緒に生活する人たちの間がうまくいっていることが、何よりも「幸せ」なことであるので、まず、そのことを第一に心がけることになるかと思う。むろん、ある程度の物質的（金銭的）充実というものも、当然、必要にはなってくるだろうが、しかし、何よりも一緒に生活する人たちが親密であることが、何よりも「幸せ」なことであり、それが欠落しては、何一つ楽しいことはなく、ただただお互い「不平・不満や恨み或いは憎しみ」などを意味なくぶつけ合うことになってしまうことも多く、それゆえ、まず第一に、一緒に生活する人たちの「意思疎通」（心のコミュニケーション）を図ることが、何よりも大事なことになって来るかと思う。

次に、やはり「健康」に留意することも非常に大事なことであり、例えば、「生活習慣病」というものがあるが、そのような「病氣」になるのも、結局は、その人自身の「責任」であることが多いとともに、重い「病氣」などを患っては、それこそ、何ひとつ充実させることも出来にくくなるわけである。それゆえ、日頃から何らかの「運動やスポーツ」などを行なって、自分の「健康管理」を行なうこともやはり大事なことになるのだろう。それらに加えて、テレビをはじめ、ビデオ（DVD）、書物、雑誌、オーディオ、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、園芸、その他、そういうものを心から楽しむというように、各人それぞれの「家族生活」（あるいは寮生活や独り暮らしその他など）を、その人なりに充実させることになるかと思う。

三、遊び

それでは、最後に、「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させるということであるが、それは、もう言うまでもなく、その人が、まさに「好きな時に好きなことを好きなように思いっきり遊び楽しめば、それでよいこと」であり、それ以外のことは、すべて

余計なことになるかと思う。が、敢えて、それに加えて、ただ単に飽くなき欲望を盲目的に「むさぼる」ということではなくて、むしろ、その「一つ一つ」をじっくりと「深く味わう」ということについて、少し話してみたいと思う。

それは、一体、どういうことかと言えば、例えば、テーブルの上に数多くの料理があるとして、それをできるだけ数多くの「品と量」とを口の中にどんどんかっこみ、そして、食った食ったと満足しているような状態と、その「一品一品」をじっくりと深く「味ひ分け」ながら、その食事を心から楽しむのでは、やはり違ってくるだろう。——例えば、他人よりも少しでも数多くの「映画」を観たのだから、それだけ自分のほうが幸せだというような問題ではなく、その一つ一つの「映画」をほんとうに心の底から深く「味わえて」いるのかどうか。つまり、ただ単に表面的な「内容」（ストーリー）を楽しんでいるだけなのか。それとも、もつとその「映画」の本質的な部分まで深く厳密に見極めながら、「なるほど、ほんとうに素晴らしい！」と、心の底から深く「味わえて」いるのかどうか？

それは、文学、音楽、絵画、演劇などをはじめ、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、また、将棋、囲碁、釣り、手芸、旅行（ドライブ）、あるいは様々なスポーツ、園芸、その他、何であれ、自ら行なう場合でも、或いは、他人が行なっているのを見聞きするような場合であれ、とにかく、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つをできるだけ深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ようにすることによって、その対象の「本質的な部分」（或いは「根源的な部分」）などが見えて来るということであり、そして、その対象の「本質的な部分」（或いは「根源的な部分」）などと深く交わって、楽しむ。或いはまた、深く溶け合って、喜ぶ。それが、いわゆる「人生の深み」でもあり、そのようなことの「積み重ね」によってこそ、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

むろん、人によっては、何もできるだけ深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」などという面倒なことなどはせずに、その人のまさに「見たまま、聞いたまま、嗅いだまま、味わったまま、感じたまま」に心から楽しめば、それでも十分ではないかと反論する人も非常に多いかと思う。確かに、そのように「気楽に楽しむ」ということも、非常に大事なことであり、あるいは、それでも十分なのかも知れない。しかし、例えば、野球などの中継を観ていると、その一つ一つのプレーの細かなところまで十分に理解できているのと、そういう細かなことは、何も分からずに、ただ単に「投げた、打った、走った、捕った、勝った、負けた」というように「表面的な現象」だけしか理解できていないのでは、たとえ同じようにその試合を「心の底から楽しんだ」といっても、その「味わいの深さ」というものは、全く「全然違ったもの」になるだろう。そのように、この世にある実に様々な対象の、その一つ一つの対象を、どのくらい深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ことができ得るかに応じて、その人の「人生」も、より深まっていくことになるのである。

*

*

それでは、もう一度、なぜ、「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるのかと問えば、それには、次のような非常にはつきりとした理由があるからである。つまり、——例えば、「仕事」（社会的な活動）などがどれほどうまくいっていても、それを

以って、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)の「穴埋め」には「決してならない」ということである。それは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことであり、例えば、「仕事」(社会的な活動)の充実から得られる「喜び」と、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)の充実から得られる「喜び」と、そして、「遊び」(趣味や娯楽やレジャーなど)の充実から得られる「喜び」とは、その一つ一つは、全く全然「別の喜び」になるからである。——つまり、「仕事」(社会的な活動)から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「手応え」志向であり、また、「生活」(主に各人の家庭《家族》生活)から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「幸せ」志向であり、そして、「遊び」(趣味や娯楽やレジャーなど)の充実から得られる「喜び」とその「志向」は、まさに「楽しさ」志向であり、それゆえ、その一つ一つの「喜びと志向」は、全く全然「別の喜びと志向」になるのである。それゆえ、一方が一方の「穴埋め」には「決してならない」ということが、最も「大事な認識」になるのである。だからこそ、まさに「三つの充実」というものがどうしても必要不可欠になるという結論になるのである。

以上、われわれ人間にとつて、一体、どういう人生であれば、より「幸せ」であるのかという問題については、いわゆる「三つの充実」(それは「仕事、生活、遊び」という、この「三つの充実」を心がけるようにすることによって、より深い「充実感や満足感」などが得られるようになるということである。

*

*

欲と情

欲と情

例えば、われわれ人間は、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされているものであるが、そのなかの「欲」としては、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、支配欲、独占欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思う。それでは、その「欲」というのは、一体、何なのかと問えば、それは、大きく二つに分かれ、一つは、生きていく上で、どうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものである場合と、もう一つは、いわば「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するような場合とがあるかと思う。そして、最初の生きていく上でどうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものは、まさに「生きてはいけない」ということであり、それゆえ、その「欲」というものは、まさに「個体維持」（つまり「生存欲」）から生じて来る「欲求」ということになるかと思う。

例えば、動物たちの「欲」（欲求）というのは、基本的には、すべて「個体維持」と「子孫保存欲」から生じて来るものであり、それゆえ、われわれ人間のように「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するというような場合は、たとえあつたとしても、それは、極めて「限られたもの」になるということである。一方、われわれ人間というのは、もちろん、同じ「動物」であるので、ほかの動物たちとまったく同じように、いわゆる「個体維持」と「子孫保存欲」という「二大本能」は、当然のことながら、しっかりと持ち合わせているわけだが、それに加えて、「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために「欲する」というような場合も、また、しっかりとあるということである。そして、前者が、「第一欲求」としての「動物的欲求」であるとすれば、後者は、「人間的欲求」としての、いわば「第二欲求」以上ということになるのである。

一、欲

それでは、「欲」の問題というのは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、次のようなことである。例えば、お金がほしいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、巨万の富がほしいと思う。それ自体にも、何の問題もない。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、その「お金」を手に入れる「手段の方法」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、お金を「正当な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。――同じように、例えば、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、できるだけ数多くの異性と「恋愛体験」を持ちたいと思う。それ自体にも、ふつう問題は無い。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、「性欲」を「正当な手段」（例えば同意その他）などで満たす場合には、ふつうであれば、問題は無く、逆に、「性欲」を「不正な手段」（例えば強制その他）などで満たそうとする場合にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。

つまり、「欲」から生じる「悪」の問題というのは、結局は、様々な「欲」を満たす時のその「手段の方法」によって、様々な「問題」が生じて来るということである。つまり、

それがたとえどのような「欲」であっても、いわゆる「正当な手段で手に入れた場合」であれば、基本的には、これという「問題」はなく、逆に、いわゆる「不正な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その「不正な手段」（或いは「不正な行為」としては、大きく「三つぐらい」に分類でき、その一つは、いわゆる「法」（法律）などに触れるような「不正的な行為」であり、そのような「不正的な行為」に対しては、何らかの「罰則」（例えば「刑罰」）などが課せられることになる。一つは、何らかの「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などに所属している、その「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などの「規則」その他に明らかに反するような「不正的な行為」をした時に、その「組織や団体」などから、何らかの「罰則」その他を受けるような場合であり、そして、もう一つは、いわゆる「慣習的規範」（例えば、冠婚葬祭、その他のマナー）などに明らかに反するような言動、あるいは、われわれ人間の「道徳観・倫理観」などに明らかに反するような「不正的な行為」などに対しては、何らかの「批判や非難」などを浴びることになるということである。

二、欲そのもの

それでは、「欲」そのもの、というのは、一体、どういうものであるかと問えば、それは、まさに「むさぼる」ということであり、その「むさぼる」というのは、何がなんでも手に入れたらという「欲求」でもあり、それゆえ、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、様々な「不正的な行為」が生じやすくなるということである。例えば、お金が欲しいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「お金」を手に入れたらという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、ひったくり、万引、その他」などが生じやすくなるということである。また、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「性欲」を満たしたいという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……痴漢、強制わいせつ、強姦（輪姦）、子供への性的虐待、その他」などが生じやすくなるということである。また、権力や社会的地位などがほしいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「権力や社会的地位」などを得ようとする「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「実に様々な策略や陰謀あるいは不正的な行為」その他などが生じやすくなるということである。

三、情

一方、「情」としては、例えば、「快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それでは、「情」の問題としては、一体、何が「問題」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、上述のような「情（感情）」（特に「^{マイナス}の感情」）などに振りまわされて、自分自身を見失うようなところに、様々な「問題」が生じて来ると

いうことである。例えば、ある人に「恨みの感情」を抱いたとする。それ自体には、何の問題もない。なぜならば、その人が「頭の中」(或いは「心の中」)で何を思い、どのような「感情」を抱こうが、それは、その人の全くの「自由」だからである。ただ、「問題」なのは、その「恨みの感情」にかられて、何らかの「不正的な行為」を實際に行なうところに、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その最悪の「ケース」としては、例えば、相手に様々な「暴力」(暴行)などを振ったり、或いは、相手を殺傷したりして、いわゆる「犯罪的な行為」にまでなってしまうということである。

四、結び

つまり、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)では、実に様々な生々しい「欲望や感情」などが、絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、もちろん、それがそのままに現われるのではなく、ふつうであれば、その人の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)によって自然とコントロールされて、いわば「人間らしい言動」になって外に現われて来るということである。逆に言えば、その人の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)による「支配」(コントロール)が弱まれば弱まるほど、それだけその人の生々しい「欲望や感情」などは、そのままに現われやすくなるということである。それは、とくに酒に酔っているような時には、そのような傾向がより強くなるかと思うが、それは、言うまでもなく、その人の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)による「支配」(コントロール)が弱まり、それに代わって、その人の「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などが、その生々しい「鎌首^{かまくび}」を持ち上げるようになるからである。

つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)によって強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、何か問題を起こすその瞬間は、その人の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝つてしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということがある。逆に言えば、その人の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)によってしっかりとコントロールされていけば、様々な「不正的な行為」は、それだけ起こりにくくなるということである。それゆえ、様々な生々しい「欲望や感情」などに振りまわされているような時こそは、まさにありとあらゆる「不正的な行為」などが生じやすくなる、まさに「源泉」そのものになるということである。

*

*

人間の三大欲

人間の三大欲

例えば、動物の「三大欲」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であり、それ以外は、全く考えられない。そして、われわれ人間も基本的には全く「同じ動物」であるので、それゆえ、われわれ人間の「三大欲」も、当然のことながら、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」になるというのが、今日までの一般的な「考え方」ではなかったかと思う。もちろん、それは、それで正しい「考え方」ではあるが、それでは、なぜ、われわれ人間の「三大欲」というものを、いわゆる「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」ではなくて、敢えて、それを「食欲」と「性欲」それに「物欲」（金銭欲）というようなことにしたのかと言えば、それには、次のような非常にはつきりとした理由があるからである。

一、食欲

例えば、われわれ人間の「食欲」というのは、ほかの動物たちのように、目の前にある「食べ物」をただ黙って食べているというよりは、むしろ、今日はあれが食べたい、或いは、こういうものが食べたい、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来るものであり、そのために、様々な食材を買い求めては、それらに色々な「味付け」で調理をして、より食べやすく、また、より美味しくして食べようとしているものである。それに加えて、世界中にある実に多種多様な「料理」なども、できるなら食べてみたいというような欲求とともに、同じ料理でも、より美味しいものを愛し求めているような、そういう非常にはつきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

それでは、その「食欲」というものを幾つかに分類してみると、一つは、「生きんがための食欲」であり、それは、まさに「個体維持」（或いは「生存欲」としての「食欲」であり、この点においては、「動物」も「人間」も全く同じであり、何一つ異なるところはないのであり、そして、これこそは、まさに「本能」そのものの「食欲」である。

一方、われわれ人間の場合には、それだけではなく、どうせ食べるならば、より「美味しいもの」が食べたいという「強い欲求」があり、そして、この「欲求」こそは、ほかの「動物」たちとははつきりと違う、まさに「人間的な欲求」の一つであり、もちろん、ほかの「動物」たちにも、いわゆる「まずいものや嫌いなものよりはうまいものや好きな方を選んで食べる」というような「基本的な欲求」は、当然あるだろうが、しかし、われわれ人間のように、今日はあれが食べたい、或いは、こういうものが食べたい、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来て、そのために、様々な食材を買い求めては、それらに色々な「味付け」で調理をして、より食べやすく、また、より美味しくして食べようとしている「動物」などはどこにもいないのである。なぜならば、それらは、「本能」そのものの「食欲」（つまり「大脳辺縁系」の「食欲」）だけではなく、それらにわれわれ人間のまさに「知的部分」（つまり「知性＋理性＋母体のようなもの」）がつけ加わった、まさに実に多種多様な「欲求」になっているからである。それは、「美味しい料理」だけではなく、例えば、「健康によい料理」とか、「美容によい料理」とか、或いは、「長生きの出来る料理」とか、その他、その「欲求」はどこまでも拡大していくものである。

ところで、女性たちは、比較的頻繁に何かを食べたり飲んだりしていますが、それは、むろん、空腹を満たすための行為であるとともに、それに加えて、もう一つは、その場の「緊張感」や「ストレス」その他などの解消のための行為でもあるということである。

そのいちばん良い例は、次のようなものである。つまり、女性たちは、何よりも「甘いもの」(つまり「スイーツ」)が大好きであり、それゆえ、よく「甘いものは別腹」と言っていて、好んで食べていますが、その理由の一つとしては、甘いものは、ふつう高カロリーであり、その高カロリーの炭水化物は、体の中に摂取されると、まさに「皮下脂肪」に変わって、それがまさに「太る理由」でもあるが、それとともに、その「皮下脂肪」が、実は「女性らしい肉体」を作っているとともに、その「皮下脂肪」の中にこそ、女性にとっては不可欠な「女性ホルモン」が蓄えられ、それゆえ、その「皮下脂肪」が不足すれば、当然、「女性ホルモン」を十分に蓄えられず、女性としての「体系や機能」などが十分に維持できなくなってしまうのである。だからこそ、女性たちはどうしても「甘いもの」がほしくなるのである。そして、もう一つの理由は、「甘いもの」(つまり「スイーツ」というのは、何よりもいちばん簡単かついちばん確実に「脳に満足感」(或いは「心に満足感」)が得られるものであり、それゆえ、いわゆる「甘いもの」(つまり「スイーツ」)を食べるといふ行為は、本人たちもそれとは気づかないままに、男性をも含めて、いわば「疲労回復」や「欲求不満」或いは「ストレス解消」などの最も手取り早いかつ最も確実な方法の一つになっているということである。

二、性欲

さて、次は「性欲」であるが、それを大きく三つに分けてみると、その一つは、「愛情欲」であり、一つは、まさに「セックス欲」であり、そして、もう一つは、いわゆる「子孫保存欲」になるかと思う。それでは、まず最初に、「愛情欲」から考えてみたいと思うが、それは、次のようなことである。——つまり、われわれ「人間」だけではなく、ほかの「動物」たち(例えば「鳥類や哺乳類」など)をも含めて、この世に誕生した「ひなや赤ちゃん」などが何よりも最初に求めるものは、一体、何かと敢えて問えば、それは、一つは、まさに「食べ物」(つまり「えさか母乳か」)であり、それが思うに得られなければ、やがて「餓死」するしかない。そして、もう一つは、やはり「親の愛情」であり、親がせっせとエサを運んで来たり母乳などを与えてくれる「愛情」によってこそ、初めて、その「ひなや赤ちゃん」などは生きることができ得るのである。それゆえ、この「二つ」(「食欲」と「愛情欲」というのは、文字通り、まさに「本能的欲求」そのものである。そして、人間の場合、その「愛情欲」というのは、どんなに拡がりを見せて、最初は、最も身近な「家族」(両親や兄弟(姉妹)、祖父母、その他)などの「愛情」を求めるものであるが、やがて、「近隣社会」での近隣の人たちとの「人間関係」(そこでの人間らしい愛情を求める)、また、保育園や保育所或いは幼稚園などでの保育士や先生或いは園児たちとの「人間関係」(そこでの人間らしい愛情を求める)、そして、小学校や塾や習い事或いは部活などでは、先生や監督・コーチ或いは生徒その他との「人間関係」(そこでの人間らしい愛情を求める)、さらに、「中・高時代」に入れば、今度は、第二次性徴とともに、自我がはつきりと目覚めることによって、まさに「異性への関心」も高まり、

その異性との「恋愛欲」(愛情欲)などもはっきりと生じて来るというように、われわれ人間の「愛情欲」というのは、どこまでも拡大していくものである。

次は、「性欲」の中のまさに「セックス欲」(或いは「交尾欲」)であるが、それは、われわれ人間以外の、ほかの動物たちの「性欲」というのは、そのほとんどが、いわゆる「子孫保存欲」のためのものであるが、われわれ人間の「性欲」というのは、そのような「子孫保存欲」のためだけではなく、実に多岐に渡っているものであり、例えば、今日は、こういうアダルト雑誌やビデオ或いはDVDやアダルトサイト、その他、そういうものを観てみたいとか、また、誰々が好きだとか嫌いだとか、つき合いとか、デートしたいとか、あるいはこういう「セックス」がしてみたいとか、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じて来るとともに、いろいろな人との「恋愛や性交渉」その他なども楽しみたいというような、非常にはっきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

三、睡眠欲

ところが、「睡眠欲」というのは、例えば、用をもよおして、仕方なくトイレに行くようなところがあり、そこには、これという「選択の余地」などあまりなく、いわゆる「睡眠」に襲われた時には、その「睡眠」にただただ身をまかせられないものである。それは、いわゆる「欲」というよりは、遙かに「生理的欲求」であり、もちろん、「食欲」も「性欲」も同じように、まさに「生理的欲求」ではあるが、ただ、「睡眠欲」や「休息欲」というのは、自分の身体をひたすら休ませたいというだけの「欲」(欲求)であり、それは、いわば「植物的欲求」であり、一方、いわゆる「食欲」や「性欲」というのは、いろいろなものをどこまでも貪欲にむさぼりたいという、まさに他に向かつての意欲的な「欲」(欲求)であり、それは、むしろ「動物的欲求」であるということである。

ちなみに、疲れて来ると、なぜか「性欲」が生じて来るとい話があるが、それは、「疲れ」(或いは「酒酔い」なども同じであるが)、いわゆる「知性や理性」などの支配(コントロール)が弱まって来ると、いろいろたまっている「ストレス」や「欲求不満」などを本能である「食欲」や「性欲」(或いは「自慰行為」などで解消しようという「本能的な働き」が、本人の意志とはあまり関係なく、自然と生じて来るといことである。

四、「物欲」(金銭欲)

最後に、「物欲」(金銭欲)であるが、前述のように、「睡眠欲」や「休息欲」というのは、自分の身体をひたすら休ませたいというだけの「欲」(欲求)であり、それは、いわば「植物的な欲求」であり、一方、いわゆる「食欲」や「性欲」というのは、いろいろなものをどこまでも貪欲にむさぼりたいという、まさに他に向かつての意欲的な「欲」(欲求)であり、それは、むしろ「動物的な欲求」である。そして、われわれ人間にとって、そのような傾向がより強いのは、いわゆる「睡眠欲」よりは、むしろ遙かに「物欲」(金銭欲)の方であり、そして、その「物欲」(金銭欲)というものは、まさに実にいろいろなものやできるだけ多くのもの(或いは「お金」)などを、どこまでも貪欲にむさぼりたいという非常にはっきりとした意欲的な「欲」(欲求)になるといことである。

例えば、生活が非常に苦しい時には、買いたいものも思うように買えず、また、したいことも思うようにできないような生活状況かと思うが、やがて、その人が金持ち（或いは「大金持ち」）になった時に、その人が最初にすることは、一体、何かと敢えて問えば、それは、一言で言えば、買いたくても買えなかったようなものを買いまくり、また、したくてもできなかったようなことを好んでするようになるということであり、例えば、高級なマンションやマイホームなどを購入し、様々な豪華な室内装飾や家電類などを買い揃え、車なども高級車や外車、また、高級な衣服類をはじめ、家具類や寝具類、また、カバン・バッグ・時計・アクセサリ類、その他なども、有名なブランド品などで買い揃え、ジムやエステ或いは高級レストランや高級店などに通い、そして、海外旅行などにも頻繁に出かけるというように、われわれ人間の「物欲」（金銭欲）というのは、どこまでも行っても際限のないものであり、そのためには、何が何でも「お金」というものが不可欠であり、それゆえ、われわれ人間というのは、お金、お金とお金をまるで「神様」のように崇めて、お金のためなら、どんなことでもやりかねない、或いは、どんなことでも喜んでするというような、それほどまでの意欲的な「欲」（欲求）であるということである。

それに加えて、「物欲」（金銭欲）というのは、ほかの動物たちには、基本的にはなく、われわれ人間に至って、初めて生じて来た「欲」（欲求）であり、それゆえ、動物の「三大欲」（人間も含む）というのは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であるが、一方、われわれ人間の「三大欲」というのは、むしろ「食欲」と「性欲」それに「物欲」（金銭欲）とした方が、遙かにわれわれ人間の「実情」に合ったものになるということである。

*

*

種族保存欲

例えば、この地球上のありとあらゆる動植物は、何よりも「子孫を残す」ことを最優先させている。もちろん、「個体維持」も大事なことではあるが、それ以上に最優先させているものは、まさに「子孫を残す」ことであり、しかも、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。——例えば、動物界では、オス同士が闘い、必ず、勝ったオスとメスが交尾をして、より強い「子孫」を残すような「大原則」ができています。また、サケなども広い海から生まれ故郷の川へと遡上して、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。また、鳥たちの渡りの理由も、一つは、エサのためと、もう一つは、繁殖のためであるが、渡りをするためには、どうしても強い生命力が必要であり、また、鳥の「求愛行動」なども、結局は、生命力の「力強さ」が要求されるものであり、すべては強い「子孫」を残すための「仕組み」であり、そして、そのような「仕組み」を創り出しているものこそは、まさに「遺伝子」ということである。

一方、われわれ人間は、何よりも「自分が大事」であるという意識を持ち合わせているかと思うが、それでも、例えば、親たちは、自分の「子供や孫たち」のためなら、自分を犠牲にしてもよいという意識が自然と生じてくるということである。それは、一見、われわれ人間の「理知的部分」（知性や理性など）がそう考えて行動しているように思えるが、実はそうではなく、本当のことを言えば、われわれ人間をも含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、いわゆる子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受けているということである。それは、この地球上に生命が誕生したのは、約四十億年ぐらい前であるが、その生命が様々な進化を遂げながら今日まで永々と生き長らえて、今日でもなお地球上にこれほどまでの「生命体」が生存し続けている。「最大の理由」は何かと敢えて問えば、それは、われわれ人間を含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、まさに子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受け続けているからである。そして、それは、そのまま自分の「遺伝子」（子孫）をできるだけ多く残そうとしている「遺伝子自身の働き」に他ならず、それは、一般的には、いわゆる「本能」（今日的には「利己的遺伝子」と呼ばれているものである）。

例えば、動物たちは、ことさらに交尾そのものがしたくて交尾をしているというよりは、むしろ遺伝子（本能）から「交尾をしるとつき動かされて交尾をしている」ということである。また、われわれ人間も、自分の意志であれこれセックスしているように思いがちであるが、もちろん、そういう一面は確かにあるが、しかし、自分自身にも自覚できない最も根源的には、むしろ絶えず遺伝子（本能）からセックスをしるセックスをしるとつき動かされてセックスをしているということである。それは、例えば、異性への性的な「興味や関心」などは、死ぬまで途絶えることはなく、また、異性のちよつとした性的な「姿や仕草（言動）」などにも、すぐに「性衝動」が生じるような「仕組み」が、すでにでき上がっているということである。——つまり、動物の場合であれば、繁殖期が来れば、必ず本能的（衝動的）に「繁殖行動」へと向かっていくものであるが、一方、人間の場合には、動物ほど直接的ではなく、いわゆる「性衝動」がはつきりと生じることによってこそ、初めて「セックスができる」という「仕組み」（大脳辺縁系）になっていて、逆に、「性衝動」が生じなければ、セックスはできないということである。それをもっと具体的に言えば、

特に男性の場合、何らかの「性的刺激」を受けることによって、初めて「性欲」が生じるとともに、そのはつきりとした「性欲」（勃起）によってこそ、初めて、セックスが「可能になる」ということである。そして、そのような「性欲」を生じせしめているものは、もちろん、「仕組み」としては「大脳辺縁系」であるが、しかし、そのような「仕組み」を創り出したのは、まさに「遺伝子の働き」であり、「性欲」（「性衝動」）そのものは、そのまま「本能」（つまり「遺伝子の働き」）に他ならないのである。

つまり、われわれ人間が「セックス」をするのは、自分の「理知的部分」の働きで行なっていると思っている人は非常に多いかと思うが、むしろ、そういう一面は確かにあるが、しかし、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）は、あれこれ「セックスのことを考える」ことはでき得ても、もともと「性衝動」そのものはないのであり、それゆえ、われわれ人間の「理知的部分」の働きだけでは、セックスはでき得ず、それにはつきりとした「性衝動」が加わることによって、初めて「セックスが可能になる」とともに、そのような「仕組み」を創り出しているのは、まさに「遺伝子の働き」であるということである。——それでは、なぜ、われわれ人間は、ほかの動物たちとは違って、そのような「仕組み」になっているのかと問えば、それは、もともとからあった「古い皮質」（つまり「大脳辺縁系」≪食欲や性欲その他の本能を生み出している部分≫）に加えて、動物から人間への進化の過程で、いわゆる「新しい皮質」（特に「前頭前野」≪いわば「理知的部分」≫）が覆いかぶさるようになり、大きく発達することによって、いわゆる「本能」をある程度コントロールでき得るような「仕組み」となり、その結果として、われわれ人間にとっても、もちろん、「食欲」や「性欲」という、この「二大本能」は、ほかの動物たちと全く同じように、最も「根源的なもの」であることには変わりはないが、その一方で、われわれ人間というのは、「新しい皮質」（特に「前頭前野」≪いわば「理知的部分」≫）の著しい発達によって、今日のようなかなり高度な「文化や文明」などを築き上げることを可能にして来たということでもあるのである。

*

*

変身

「変身」について

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形」^{すがたかたち}がある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあり得ることである。それは、いったいどういうことかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、ある日、交通事故に遭ったとする。しかも、それは、極めて深刻な交通事故であり、それゆえ、交通事故に遭った瞬間から、その人の意識は、まさに意識不明状態になってしまったとともに、生死にも直接かわるような極めて深刻な傷を負ってしまったとする。その場合、通常、誰かの通報によって救急車が呼ばれ、その救急車に乗せられ病院に運ばれては、すぐにも「大手術」が何時間もかけて行なわれることになるかと思う。そして、その人が麻酔から覚めて、意識が戻った時には、その人は、まさにベットの上で寝ているような状態になるわけである。そして、自分が交通事故に遭ったことを想い出している、それでは、自分の体は、いったいどうなったのが気になり始め、そこで、どうなったのかを尋ねた時に、家族の誰かから、実は、これこれこういう事情で、一方の脚を切断しなければならなかったことや、実は、脊髄が損傷していて、歩けないので、これからは、車いす生活をしなければならぬと告げられたとする。それは、その人にとっては、極めて「大きなショック」であり、それゆえ、最初は、うそだろうという感じで、到底受け入れ難い気持ちにもなるかと思う。

それは、カフカの『変身』という作品の、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話と、どこか共通するところがあり、それは、自分の「体」が、突然、良い方向ではなく、むしろ悪い方向へと「変身」してしまったということである。しかも、ここで最も大事なことは、例えば、化粧（メイク）や服装（ファッション）、その他などで自分をイメージチェンジして変えるのも、確かに「変身」ではあるが、しかし、そのような「変身」は、いつでも「元の状態」に戻れる変身であり、一方の、カフカの「変身」のように、二度と元に戻れない「変身」とは、根本的に違うものである。それに加えて、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、むしろその人の「体」が、「変身（変わって）」しまったということである。そして、その人の「体」が、悪い方向へと「変身」することによって、家族はともあれ、他人のその人を見る目も、大きく変化しやすいくということである。つまり、自分の「心」そのものは、何も変わっていないくても、自分の「体」（つまり「姿・形」^{すがたかたち}）が、悪い方向へと「変身（変わって）」しまっただけで、他人の自分を見る目が、大きく変化しやすいくということである。

一、家族の目

まず、家族の問題から考えてみたいと思うが、家族にしてみれば、命が助かったということ、よかった、よかったということになるかと思う。もちろん、その気持ちにうそはないだろう。そして、入院生活も終わり、家に戻ってきて、今までと同じような生活を始めることになるかと思うが、しかし、今までと何から何まですべて同じということにはな

らないだろう。それでは、いったい何がどう変わるといえるだろうか？ それは、まず、本人自身の気持ちの「変化」が生じ、そして、もう一つは、家族の気持ちの「変化」も生じて来るということである。そして、本人自身の気持ちの「変化」としては、当然のことながら、最初の頃は、どうしても事実を事実として受け入れ難く、それゆえ、荒れた気持ちにもなり、時には、家族にやつ当たりをしてみたりとか、また、時には、自分の部屋に閉じ籠もって絶望的な気持ちになったりするかと思うが、しかし、やがては事実は事実として受け入れざるを得ず、その結果として、前向きに生きていくことを考えるようになるということである。

一方、家族としては、そのように心を悩ましている姿を見ることは、非常につらいことであるとともに、できるだけ今まで通り自然体でサポートしていきたくと思うわけである。もちろん、それは、その時だけのことではなく、何年も何十年にも渡って、楽しい時もあるし、辛い時もあるかも知れないが、とにかく継続して行なうようになっていくということである。それは、祖父母を初めとして、家族の誰であれ、また、病氣、介護、身体障害、その他、どのような場合でも、基本的には、すべて同じことになるかと思う。つまり、家族の場合には、その人の「姿・形」がどのように変化していこうとも、そういうこととはあまり関係なく、それ以前とそれほど大きく変わることもなく、最後まで一緒に生きる（或いは面倒を見る）というような気持ちを持ち続けることになるかと思う。

二、他人の目

さて、問題は、他人の「自分を見る目」であるが、他人の「自分を見る目」というのは、自分の「姿・形」の変化とともに、他人の「自分を見る目」も変化しやすいということである。それは、いったい何を意味しているのかと言え、それは、次のようなことである。――つまり、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているところがあるということである。それでは、なぜそのような見方をするのだろうか。それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などは、われわれの五感（つまり見たり聞いたりすること）を通して、それなりにはつきりととらえることができやすいからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういふふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないからである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っているとともに、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるということである。一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのすべてを知りようもないので、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういふふうになっているかなどは、誰にも分かりようがない、まさに「ブラックボックス」状態であり、そ

れゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密にはなにひとつ分からないということである。

ところが、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるということである。そして、そのような傾向がはつきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになることも、結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるわけだ。それでは、いわゆる「外的事実」とは、具体的には、いったいどういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるということである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということである。それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

それでは、われわれ人間が、その人をほんとうに理解するためには、いったいどうしたらよいかと言えば、それは、大きな川を「下流から中流、中流から上流、そして、上流から源泉へと溯さかのぼるようにすることである」が、それは、次のようになるかと思う。

まず最初は、その人の外に表れる様々な「外的事実」を、できるだけ厳密に「観察」（分析）することであるが、もちろん、それだけでは、不十分であり、それらを手がかりとして、今度は、その人の「心の中」に深く溶け入っては、自らその人となって、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみることによってこそ、その人の「内的世界」の「表面的部分から中間的部分、中間的部分から深層的部分、そして、深層的部分から最も深奥にあるであろう『中心核』そのもの」へと理解を深めていくことである。

そして、その最も深奥にある「中心核」そのものは、まさにその人をその人たらしめている「精神的源泉」であり、その「精神的源泉」からこそ、その人なりの「思いや考え」などが絶えず生じて来るとともに、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、

また、価値観、道德観、人生観、生き方、その他」なども形成される、まさに「源泉」そのものになるということである。

三、あるがままの人間

さて、われわれ生身の人間というのは、本来、「良い面も悪い面もその他ありとあらゆる面」を同時に（潜在的に）持ち合わせているものであり、それゆえ、その人の置かれたその時々状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりすることである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々状況に応じて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりすることである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要がある、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えるやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

例えば、社会的な地位もあり、また、思慮分別もあると思われる人が、何か飛んでもないことをすると、われわれは、一応に驚いたりするが、しかし、その人がどういう職業に就いているからとか、ふだんは、こういう人だからということ、その人間を推し測ることはできないのである。というのも、われわれ生身の人間の「心の中」で蠢いている実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われるのではなく、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされた形で、外に現われてくるものだからである。

それゆえ、外に現われ出た「言動」だけを見て、あの人は、ああいう人と断定するわけにもいかないのである。——つまり、われわれ生身の人間の「心の中」には実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、絶えず現われたり、消えたりしている状態であるが、しかし、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされている状態であり、それゆえ、もしその人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、（例えば、酒などを大量に飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には）、実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われやすくなるということである。

それでは、どちらがほんとうのその人なのか？ つまり、知性や理性などでコントロールされている「社会的自我」の時なのか？ それともコントロールが弱まり、様々な「欲望や感情」その他などに振りまわされている「利己的自我」の時なのか？ 恐らく、それらに自分でも全く自覚できない「無意識の世界」などを加えたものが、まさに「その人」ということになるのだろう。

四、変身（表面的現象）

ところで、自分の「体」が、悪い方向ではなく、むしろ、良い方向へと「変身」するという場合もあるかと思う。例えば、有名な『みにくいアヒルの子』などは、まさにそのような童話であるが、その場合、みにくいアヒルの子は、その「姿・形」が、ほかの子供たちとは違っていたので、いろいろといじめられたりするわけだが、やがて、成長すると、いわゆる「白鳥の姿」へと大変身するという内容になっているかと思う。それは、いったいどういうことかと言え、それをアヒルから人間の場合に置き換えて考えてみると、その人の「心」が「変心（変わった）」わけではなく、その人の「体」が「変身（変わった）」だけであるが、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）などが、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。つまり、その人の「心」そのものは、何も変わっていないなくても、その人の「体」（つまり「姿・形」）が、良い方向へと「変身（変わった）」だけでも、他人の「その人を見る目」が、大きく変化しやすいということである。

つまり、「体」の「変身」は、その人の「見た目」、つまり、その人の「身体的特徴」（つまり「容姿・容貌」）の「変身」であり、そして、その人の「見た目」の「変身」というのは、われわれの「五感」ではつきりととらえることができ得るものであるのに対して、一方の、その人の「心」の「変心」のほうは、われわれの「五感」ではなかなかとらえにくいものであり、それゆえ、せいぜい「表面的特徴」（その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などを知る程度であり、もっと奥にある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているようなところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」）というのは、いわば「仮相」であり、「実相」そのものであるかどうかはよく分からず、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを実際に行なっているのが、まさに「思惟活動」（つまり「思考（思索）活動」）の一つの「大きな目的」でもなるわけだ。——つまり、言葉を換えれば、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によってこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。

一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまりそ

の人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」(つまり「真実・真理」)だと思ひ込みやすいということである。

五、カフカの「変身」

ところで、カフカの『変身』という作品は、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していったという「内容」になるが、それは、例えば、今、世界中に蔓延している若者たちの、いわゆる「引きこもり現象」(自分の部屋の中に閉じ籠もって、外に出てこない、或いは外に出られないという「心理的状态」)を、まさに「象徴」的に表現していることにも、あるいはなるのかも知れない。——つまり、今までは何とか「社会」(俗世間)のなかで、活発に生きていた人が、現実の様々な「人間関係」の「あつれき」(摩擦)のなかで、実に様々に「傷つき、疲れ果て」て、次第に「心の活力や活気」などを失い、やがては、学校に行きたくても行けないような「登校拒否」、また、会社に行きたくても行けないような「出社拒否」、或いはまた、「社会」(人混み)のなかに出て行きたくても、出て行けないというような、そういう人間に「変身」してしまうという、まさに「引きこもり現象」(それは自分の「心の中」に閉じ籠もってしまうという現象)を、あるいは「象徴」的に表現していることになるのかも知れない。

もちろん、カフカの「変身」というのは、その人の「姿」が変わるのであり、それゆえ、いわゆる「心」が変わるというのではない。しかし、例えば、「体」が悪い方向へと変化するということは、その人の「心」もそのような方向へと変化しやすく、また、「心」が深く「悩み苦しむ」ようになれば、その人の「体」もそのような方向へと変化しやすくなるということ、それゆえ、われわれ人間の「体」と「心」というのは、決して「別々のもの」ではなく、むしろ、極めて「親密な関係」にあるということである。例えば、「体」が悪化したために、「外」に出られなくなるのと、「心」が悪化したために、「外」に出られなくなるのでは、もちろん、最初の「動機」は違うとしても、しかし、長い間、独り「部屋」の中に閉じ籠もって、外にはあまり出なくなるような状態が長く続けば、やがては、ほとんど同じような「心理的状态」を生み出すことになるかと思う。それは、いったいどういうものかと問えば、それは、部屋の中にいる間は、その人は、「精神の安定や安心」などが得られているとともに、何か好きなことを行なっている時には、その人なりの「満足感や充実感」などを得ることもでき得る。しかし、「外」に出て行くのには、やはり不安がよぎり、人と会うのも、また、人と面と向かって話をするのも不安を感じてしまう。それは、なぜかと問えば、それは、結局、——自分が何らかの意味で「傷つく」ことになるのが不安(嫌)だし、また、他人を何らかの意味で「傷つけてしまう」ことになるのも、そのどちらも「嫌だ」という「心理」にどこか似ているということである。

一方、その人を取りまく「家族関係」というものにも、大きな「問題」が生じることになるが、カフカの「作品」のなかでは、例えば、母親は、息子の姿を見て、いわゆる「失神」をしてしまうが、それは、まさに母親の「失望感」の表れでもあるとともに、父親は、そのような息子に対して、リングの実を投げつけ、それが背中にめり込むことになるが、それは、まさに父親の「怒り」の象徴でもあり、そして、妹は、最初のうちは、兄の面倒をせっせと見ることになるが、それでも、最後には見放してしまう。それは、結局は、ま

さに妹の「諦めの気持ち」の表れでもあるということである。そして、毒虫に「変身」してしまった主人公は、自分の「気持ち」（真意）を家族に正確に伝えることもできず、（それは、虫の状態なので、言葉による「意思疎通」もうまくいかず）、結局は、お互い親しく話し合って「理解し合う」ということもできずに、主人公は、まさに孤独なまま「食事も摂らなくなり、死んでしまう」ということである。

六、対応の仕方

それでは、そのような場合、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、段階を踏まえて「外」に出るしかない。もちろん、「外」に出れば、実に様々なことで「傷つく」ことになるだろうし、また、他人を「傷つけてしまう」こともあるかも知れない。しかし、それが、まさに「生きる」ということだと覚悟を決めて、「外」に出るしかない。そうすれば、自分が「傷つく」こともあるだろうが、また、「楽しい」こともあるかも知れない。また、人との交流をはじめ、様々な「助言や援助」その他などが得られることもあるかも知れない。そのようなところから、自分の「生きる場所」を見つけ出していくということである。——ただ、若い人たちのなかには、例えば、「生活保護」などの受給を受けて、それに甘んじて長々と「ぬるま湯」につかっってしまう人も多いかと思うが、その場合、それが短期であれば、それほど問題はないだろうが、それが長期に渡るということであれば、それは、真に自分を「生かす道」ではなく、むしろ、自分を「殺すような道」であり、自分の「可能性」（潜在能力）を自ら放棄してしまうものである。というのも、それは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を積み重ねることによってこそ、初めて、その人の「可能性」（潜在能力）も引き出されて来るものであるとともに、その人の「人生（道）」も、初めて開ける」ものであり、いわゆる「努力」を積み重ねることを怠って、長々と「ぬるま湯」につかっているだけでは、その人の「人生（道）」は、永遠に開けない」ということである。それゆえ、何よりも大事なことは、どのような分野のどのようなことであれ、いわゆる「努力」を何年も積み重ねることであり、そのような「努力」を何年も積み重ねていくうちに、やがては「自分の人生（道）」も、開けることになる」とともに、いわゆる自分が「心の中」に想い描くような、まさに「自分本来の人生」へと近づけていくことも、可能になるということである。

*

*

人間の基本的な欲求

人間の基本的な欲求

例えば、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはないのである。それでは、一体、どこがどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」にどれだけこだわっているのか？ それが人によってそれぞれ違って来るだけである。——例えば、食事であれば、空腹を満たさなければ、やがては死んでしまうものであり、それゆえ、何かを食べなければならぬが、その場合、空腹を満たされれば、それでも十分という場合と、あとは、その「食べ物」というものにどこまでこだわることかという、そういう「問題」が残されているだけである。つまり、下は、生きるための必要最少限度の「食事」から、上は、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くそうという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

また、「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」などにしても、人間であれば、誰もが本来持ち合わせている「基本的な欲求」であり、それゆえ、あとは、その人が「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」というものにどこまでこだわっているのか？ それによって、その人の「異性との関係」（或いは「同性との関係」）も、それぞれ「違って来る」ということである。——例えば、どうしても「子供がほしい」と思えば、人工授精でも、養子でも、ほしいということになるだろうし、また、「愛情問題」についても、誰々が好きだという場合、どこまで好きなのか？ どこまでのこだわりを持っているのか？ 誰にどこまでの「愛情」を求め、また、誰にどこまでの「愛情」を降り注ぎたいのか？ そして、「セックス」に対しても、下は、全く興味を示さない（或いは拒絶反応を示す）ような場合から、上は、できるだけ世界中のありとあらゆる異性（或いは「同性」とありとあらゆるセックスをしたいという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

そして、「物欲」（金銭欲）にしても、基本的には、誰もが持ち合わせている「基本的な欲求」であり、あとは、どういうものにとどこまでこだわっているのか？ そういう「問題」があるだけであり、例えば、下は、生活するのに必要最少限度の「物欲」（金銭欲）だけで十分とする場合と、上は、この世にあるありとあらゆるものありとあらゆるものをできるだけ何でも手に入れたいという「物欲」（金銭欲）の領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

それでは、これらは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはなく、この地点までは、人間というのは、すべて「同じ」であるということである。それでは、一体、どこからどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」の最低限度までは全く同じであるが、そのあとは、例えば、「食欲」、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、独占欲、支配欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それらにとどこまでこだわっているのか？ それぞれの「欲求」に対するこだわりの「強弱」こそは、まさに「自分は、一体、どこに位置するのか？」ということの「位置付け」であり、そういうことが、一人一人違うというだけに過ぎないのである。——それをもっと簡単に言えば、人間というのは、基本的には、

みな「同じ」であり、あとは、何にこだわっているのか？
* *
そこが「違う」だけである。

最後に辿りつく地点

最後に辿りつく地点

例えば、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……お茶漬けやにぎり飯などでもう十分」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、人間、生きていく上で、何もことさらに「美味しい料理」である必要もなく、ごく一般的に、美味しい「料理」であれば、それでもう十分ということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「国々」を旅し尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……わが家がいちばん」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、われわれ人間にとつて、最も「安心できる所」、最も「心が安らぐ所」、そして、最も「心の落ち着く所」、それは、結局、「わが家」であるということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「女性たち」と恋愛をし尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……同じ事の繰り返しに過ぎず、身も心を真ほんとうに深く溶け合える相手こそは、まさに理想である」ということになるのだろう。——また、例えば、世界中にある眼も眩くらむばかりの「衣装や品物或いは豪邸」などを手に入れて、そこに住み、それらで身を華はなやかに飾り立てても、それらは、すべて「自分の外」に存在するものであり、それゆえ、それらによって、まさに自身が真に「優れた存在」になるわけではなく、また、「社会的地位や名誉或いは又名声」なども、結局は、みな同じことであり、それらは、すべて「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏まとっているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、それらの様々な「社会的な衣装」などをすべて脱ぎ捨てても、なお、その人「自身」が、どれだけ人間として真に魅力的に「内的成長（成熟）」しているのかが、まさにその人の人間としての真の「評価」になるのである。

*

*

スランプ
その他

目次

- 一、 スランプ
- 二、 プラトニック・ラブ
- 三、 笑い
- 四、 健全な「笑い」
- 五、 友情
- 六、 自信
- 七、 漫画の魅力

*
*

スランプ

スランプについて

例えば、ソクラテスは、その『弁明』のなかで、すぐれた詩人たちは、一種の「神がかり的状态」になって、「作品」を書いているという箇所が出てくるが、そのような状態こそは、まさに超「自我」の状態なのである。

つまり、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になつていような時にこそ、それは、例えば、学者でも、芸術家でも、文筆家でも、その他、どのような分野の誰であつてもよいわけだが、何か本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、まさに「より密度の高い」（それだけ自分自身になりきっている「純粹自己」）の状態になつているのであり、そのような時には、あまり疲れを感じない。それは、尋常ならぬエネルギーが全身に満ちて来るからであり、この時ほど自分自身になりきつて生きている時はなく、まったくの「自足状態」に近いものである。そして、そのような一種の「没我的状態」になつて、本格的な「思考（思索）活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」といふようなものは、生じやすくなり、何か自分の「力（力量）」以上の真に優れた「芸術作品」などが生み出されたり、また、未だ人類によつて解明されていないような様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その人の「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるといふことである。

例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によつてのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残しているが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現しているものである。

一方、われわれは、いわゆる「スランプ」といふ精神状態を、よく経験することになるが、それは、今までは比較的容易に超「自我」の状態になれたものが、なぜか最近は、なかなか想うように超「自我」の状態になれないがために生じるものである。——つまり、われわれ生身の人間というのは、どうしても「世俗的な世界」に身をおいて実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされているために、なかなかそのような雑然としたふだんの「自我」の状態から離れて、より密度の高いそれだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態にすんなり想うように入つて行けないからである。それゆえ、いわゆる「精神の飛翔」といふようなものが生じにくくなり、好調の時のような優れた「考えや着想」などが、想うように生まれにくくなり、月並みの状態からなかなか抜け出せず、悶々とした状態である期間、ずっと過ごしてしまうのが、まさに「スランプ状態」である。

それでは、そのような「スランプ状態」から抜け出すには、いったいどうしたらよいのか？ それは、非常に難しい問題であり、これといふ「決め手」があるわけではなく、多くは「気分転換」をしたり、また、スポーツの場合であれば、例えば、基本的な「練習」などを何度もくり返しながら、いわゆる「好調の状態」にもどそうとするものである。しかし、どのくらいで「好調の状態」にもどれるかは、本人にもまったく分からない状態であり、それゆえ、できる限りのことは、すべてやり尽くして、あとは、ただ待つばかりという方法しかないところに、この「スランプ状態」といふものの最大特徴があるのだろう。

ところで、スポーツの場合、よく「無心」で試合に臨むということを言うが、その「無心」とは、いったいどういうことなのか？ それは、まさに「様々な雑念」をなくして、本来の「自分自身になりきってプレーをする」ということであり、それは、取りも直さず、雑然とした「自我」の状態から、より密度の高い「純粹自己」の状態になるということである。そして、その「純粹自己」の状態とは、すなわち、本来の「自分自身になりきって生きている状態」ということであり、そのような時にこそ、全身に尋常ならぬ巨大なエネルギーが満ちてきて、ふだんの「自我」を超えることができ得るわけである。なぜなら、本来の「自分自身になりきって生きている状態」においては、自分の持てる力のすべてを「一点に集中させること」ができ得るからであり、それに比べて、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然としたふだんの「自我」の状態の時には、自分の持ち合わせる力が、あちこちに分散してしまうからである。

例えば、「火事場のばか力」という「言葉」があるが、それは、ふだんの時には一人ではとても持ち出せないような重いものでも、火事という非常事態に臨んだ時には、なぜかたった一人でもそれを持ち出すことができるということである。それは、なぜかと言えば、それはもちろん、脳からの抑制命令が解除されて、自分の持てる力のすべてを出しきるからであるが、それに加えて、その人にとって極めて大事なものであるがために、その人の気持ちは、ひたすらその大事なものを持ち出すことだけに集中しているために、その人の持てる力のすべてがまさに「一点に集中して持ち上げている」からである。そして、その時のその人の「心的状態」は、むしろ「無心の状態」に近く、まさに「その人自身になりきって生きている状態」である。というのも、あとになって、なぜあんな重いものを持ち出すことができたのか？ 本人さえよく覚えていないことが非常に多いからである。

むろん、そのような場合の超「自我」は、本来の超「自我」とは少し違うのかも知れない。ということとは、——例えば、スポーツの場合のように、いわゆる「身体（肉体）的部分」が「ふだんの状態」を越える場合と、もう一つは、——例えば、「思考（思索）活動」などのように、いわゆる「精神（思考）的部分」が「ふだんの状態」を越える場合と、まさに、この「二つの場合」があるということである。

さて、本来の超「自我」とは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然としたふだんの「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきれている本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）になることではあるが、そのような本来の「自分自身」になるといえるのは、プラトン風に言えば、まさに「欲望的部分」や「氣概（激情）的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されるということである。——例えば、本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などにどこまでも深く溶け入っているような時には、いわば一種の「没我的状態」になりやすいものであるが、それこそは、まさに超「自我」（つまり「純粹自己」）の状態であり、そのような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、例えば、未だ人類によって解明されていない様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるということである。

一方、スポーツの場合において、いわゆる「身体（肉体）的部分」が「ふだんの状態」を越える場合であるが、その場合にも、一種の超「自我」状態になっていることに間違いはないだろう。というのも、上述のように「無心の状態」を創り出すためには、どうして

も様々な「雑念（例えば不安や迷いその他等）」をなくして、本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）になることによつてこそ、その人の持てる力のすべてを「一点に集中させることができ得る」からである。逆に言えば、自分の「頭の中」（或いは「心の中」）で、「ああでもないこうでもない」とあれこれ考えたり迷ったりしている「ような時には、自分が分散している、自分がブレているような状態であり、そのような時には、自分の持つ力のすべてを「一点に集中させることができにくい」ということである。それゆえ、例えば、すぐれたプレーができていた時には、その人自身の「心の中」では、様々な「雑念（例えば不安や迷いその他等）」が消えて、本人も驚くほど全体の動きやその場の状況が極めて冷静に観て取れている状態であるとともに、その人の「身体」（肉体）の中には尋常ならぬ「巨大なエネルギー」が全身に満ちてきて、それを「一点に集中させて爆發させる」ことによつて、その人の「身体（肉体）的部分」は、ふだんの「状態」を遙かに越えることができ得るといふことである。

ただ、ここではつきりと区別しておかなければならないことは、次のようなことである。つまり、ここで言う超「自我」というのは、いわゆるフロイトの「超自我」とは、はつきりと違うということである。そして、ここで言う超「自我」というのは、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態を超えて、より密度の高いそれだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になるといふことである。（つまり、ここで言う超「自我」とは、すなわち、「純粹自己」のことであり、そこからこそ、真に優れたものが生まれて来るといふことである。）

それをプラトン風に言えば、いわゆる「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることによつて、今までの雑念とした自我から、より自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になるといふことであり、この時ほど様々な「欲望や感情」などから開放されて、自分本来の「魂」そのもの（つまり「純粹自己」）になりきって生きている時はない。そして、そのような「純粹自己」の状態となつて本格的な「思考（思索）活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」といふようなものは、生じやすくなり、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、行動、その他」などが生み出されることにもなるということである。

*

*

プラトニック・ラブ

プラトニック・ラブ

昔は、よく『プラトニック・ラブ』という言葉が、若い人たちの間では好んで使われたりしたのだが、今日ではほとんど「死語」と化しているのではないかと思う。それというのも、今日の「考え方」では、男女間の「恋愛」を根底から成り立たせているものが、そもそも「リビドー」（性欲）であり、その「リビドー」（性的欲求）を完全に排除してしまつた精神的な「結びつき」だけの「恋愛」というものは、全く意味をなさないことになつてゐるからである。——つまり、「性的な関係」を前提として行なわれるものが、まさに男女間の「恋愛」であり、それゆえ、精神的な結びつきだけで「性的交渉」をまったく望まない「恋愛」というものは、まれにはあるとしても、今日ではほとんど一笑に付せられてしまうものである。……

また、男女の間で「友情」は、果たして可能だろうかということが、よく言われたりするものである。この問題も、男女の間で「肉体的な結びつき」を望まず、ただ精神的な「結びつき」だけで満足でき得るだろうかという意味合いを含む。つまり、男と女が親しく心や情を通わせるようになれば、自ずと「肉体的な結びつき」も望むようになるだろうという考え方に立つわけである。むしろ、本来「友情」とは、お互い相手の人間性を信頼し合つてゐるところに成り立つものであり、それゆえ、いわゆる「利害や損得あるいは性的関係」などで結びついている関係ではなく、それは、むしろ「精神的な結びつき」である。それゆえ、お互い相手の人間性が信じられなくなれば、自然とお互いの「友情」も崩れていくしかないだろう。また、親友が困つてゐる時には利害や損得などから離れて、親友のために自分にできること（例えば、精神的バックアップなど）をすることになるかと思う。そのようなことが「男女の間」で可能だろうか？　つまり、そのようなことをするのは、心のどこかで「何らかの下心」（例えば「肉体的な交渉」など）を望んでいるからではないかという問題である。——そのように「男女の間」では、どうしても「性的な感情」を完全に排除することが極めて難しい。しかし、同性の場合であれば、ふつう「性的な感情」にそれほど惑わされずに精神的な結びつきだけで十分成り立つものではないかと思う。

例えば、若いプラトンは、晩年のソクラテスとめぐり逢い、そのソクラテスと親しく言葉を交わしていくうちに、若いプラトンは、ソクラテスという人物に強く心惹かれ、惚れてしまふわけである。むしろ、それは、ソクラテスの「肉体」（容姿・容貌）に惚れたわけではなく、ソクラテスの「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れたということである。それが、まさに「プラトニック・ラブ」なのである。——つまり、「プラトニック・ラブ」というのは、確かに、最初の段階では、相手の「肉体」に惚れることから入るが、しかし、それは、あくまでも「入り口」に過ぎず、何よりも大事なことは、相手の「精神」に惚れるということであり、しかも、それは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れるということである。

それでは、なぜ、若いプラトンは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、夢中になつたのだろうか？　ここが最も大事なところであり、それは、第二次性徴とともに、目覚めたプラトン自身の「自我（自己）」が、何よりも「成長・成熟」することを望んでいたからである。つまり、若い時とは、肉体的にも精神的にもまさに「成長期」にあたつてゐるわけである。そして、肉体がどんどん成長するためには、様々な栄養価の高い「食料」

などを撰取することがどうしても必要不可欠であるのと全く同じように、その人の「精神（自己）」を真に育て上げるためには、様々な栄養価の高い「高質の知的食料」などを撰取することが、どうしても必要不可欠になって来るからである。

そして、その様々な「高質の知的食料」としては、例えば、優れた「書物」などを数多く読んだり、また、様々な「専門的（学問的）知識」などを学んだり、あるいはソクラテスのような真に優れた「精神（魂）」などと深く交わることなどの積み重ねによってこそ、その人自身の「精神（魂）」を真に「成長・成熟」させることができ得るわけである。そして、この時期のもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）こそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、その「神的な恋（エロス）」というのは、プラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとするものであり、そのようなもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）こそは、まさに「プラトニック・ラブ」という言葉の本来の「意味合い」になるものである。

ところが、それはいつ頃からか、男女間の「恋愛」において、精神的な結びつきだけで、肉体的な関係を持たない「清純な恋愛」といった曖昧な「意味合い」で使われるようになってしまった。——しかし、本来は、若いプラトンが晩年のソクラテスという真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、惚れることによって、その人自身も同じように真に優れた「精神（魂）」になろうとするためのものであり、そのためにも、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」などを最究極的に観て取るうとする一連の「恋愛」こそは、まさに「プラトニック・ラブ」という言葉の本来の「真意」になるかと思う。

ただ、ここで問題になるのは、同性との間の「プラトニック・ラブ」であれば、それほど問題はないだろうが、異性との間の「プラトニック・ラブ」の場合には、どうしても「性的な感情」が複雑にからみ合ってくる。——例えば、先生と弟子（生徒）との間では、とかく「男と女の関係」になりやすい傾向が非常に多いということである。もちろん、そういう関係になるならないは、当人同士の問題ではあるが、そういう関係になれば、どうしても「男と女の関係」への思いの方がより強くなり、それに伴い、いわゆる「プラトニック・ラブ」の方は、より後退してしまうことが多いかと思う。

ただ、ここで最も大事なことは、本来、「プラトニック・ラブ」とは、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、その人と親しく心を通わすことによって、やがては「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとするための「恋愛」であり、それゆえ、いわゆる「性的関係」を持つか持たないかは、それほど大きな問題ではないのである。（ただ、お互いが「愛欲の対象」だけになってしまうのでは、最究極的な目的でもある、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取るうとする、まさに狭義の「プラトニック・ラブ」とは、かなり違ったものにはなるだろうが……）

それに加えて、古今東西を問わず、真に優れた「文学や芸術あるいは書物」などを通じて、古今東西の真に優れた「精神（魂）」と深く交わることによって、自分自身も真に優れた「精神（魂）」になろうとする「恋愛」をも含めたものが、まさに「プラトニック・ラブ」ということになるかと思う。それは、古今東西を問わず、真に優れた「精神（魂）」に強く心惹かれ、深く交わることによって、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」

などを観て取る地点にまで到達しようとするものであるとともに、それは、何よりも「真善美」(つまり物事の「真実、真理、その他」など)をどこまでも愛し求めてやまないような「精神(魂)」になるような「恋愛」こそは、まさに「プラトニック・ラブ」(つまり「プラトニックな愛」という言葉の「真意」になるかと思う。

*

*

笑い

笑いについて

例えば、「物まね」というのは、なぜ、われわれ人間にとって面白い対象となり得るのだろうか？ この問題についても、少し考えてみたいと思う。例えば、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見ている人たちは、「あつ、似ている、似ているよ。特にここんところが非常によく似ているなあとか、あるいは、逆に、あまり似ていないなあ、どうも感じが違うな。そういう感じではなく、もっとこういう感じなんだけれどもなあ」とか、その他、そういう思いや感じで見聞きしているのが、ふつう一般的ではないかと思う。

それでは、それらは、いったい何を意味しているのだろうか？ それは、言うまでもなく、「二つのもの」（それは「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とを、あれこれ比較対照しながら、見聞きしているということである。つまり、ある歌手の歌をただ単に見聞きしている時には、その歌手の「歌い方」などをいちいち分析せずに、そのまま素直に見聞きしているものだが、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見ている時には、逆に、「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とをつねに比較対照しながら、その一つ一つをあれこれ「分析的に見聞き」していることになるかと思う。そのように、つねに「比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聞きすること」によってこそ、今までただ単にある歌手の「歌い方」をあまり分析せずに、そのまま素直に見聞きしていた時には気づかなかつた、その歌手の「歌い方」の実に様々な特徴がはつきりと見えてきて、それゆえ、あらためてその歌手の「歌や歌い方」などを、はつきりと再認識することになるということである。

もちろん、真似する人は、ある歌手の「歌い方」の特徴を巧みにとらえて、それをかなり大げさに真似をしているわけだから、真似する人は、すでに真似る歌手の「歌い方」などの特徴をよく知っていることになるわけだ。しかし、それを見ている人たちは、その「物まね」を見聞きすることによって、「ああ、そうそう、あの歌手には確かにそういう歌い方や顔の表情の仕方が間違いないあるわ」という感じで、あらためて「再認識」（つまりはつきりと知る）ことになるわけである。そして、あらためて「再認識」すること、いや楽しいこと」になっていくということである。つまり、「物まね」というのは、その真似する「対象」の「特徴や本質的なもの」を巧みにとらえて、それをわれわれの目の前にはつきりと浮かび上がらせて見せてくれるために、それを見ている人たちも、「ああ、そうそう、そういうところが確かにあるわ」という感じで、その対象の「特徴や本質的なもの」を、あらためてはつきりと「再認識」することになるわけである。

そして、そのあらためて「再認識」することによって、その「歌手」そのものへの「興味や関心」などを呼び起こし、それゆえ、時には、その「歌手」の方が、再び、人気を得て、浮かび上がって来る（或いは脚光を浴びる）ことにもなるわけである。一方、物まねの最大の「弱点」は、ある「真似る対象」（つまり「モデル」）があつて、初めて可能になるものであり、それゆえ、どうしても「真似る対象」（つまり「モデル」）に依存する傾向があるということである。もつと極言すれば、真似される人たちが、「自分の真似をすることを断じて許さない」ということになれば、真似する人たちは、公に「物まね」をすることができないことになってしまう。つまり、「真似する対象」（つまり「モデル」）があつて、初めて可能となるものであり、それゆえ、どうしてもモデルに依存する傾向が

強く、いかなるものにも依存しない独立したものは、なりにくいということである。

ただ、ここではつきりと留意しておかなければならないことは、その物まねがまさに「本物そっくり」であるような場合のことであるが、それは、次のようになるかと思う。つまり、最初は、「ああ、よく似ているなあとか、本物そっくりだなあ」というような感じで見聞きしているわけだが、やがて、それが「あまりにも似ているような時」には、いわゆる「笑い」というものは、起こりにくくなり、むしろ黙って見入ったり聴き入るような状態になってしまうのである。それは、なぜかと言えば、いわゆる「笑い」というものは、本来、「ズレ」ところから生じる面白さであり、それゆえ、まったく「ズレ」というものが感じられないものには、「笑い」というものは、生じにくいものだからである。一方、見ている人たちは、どこまで本物そっくりに似ているのだろうかと思つて、どうしても黙つて見入ったり聴き入るような「心的状態」になりやすいものである。そして、その途中で、どこか本物と違うところ（つまりズレる）ところがあれば、そこで、「あつ、ここんところは、ちよつと違うなあ」という感じで最後まで見聞きしたあとで、「それにしても、よく似ていたなあ」といった感じになるかと思う。一方、最後の最後まで本物そっくりであれば、それは、「もうすごいなあ」という感じとともに、本物の歌手がまさにそこで歌っているというような「感じ」（錯覚）にも襲われるものである。

そして、今度は、自分自身が、カラオケなどで、ある歌手の歌を身ぶりも歌い方も、それこそ、できるだけ本物そっくりに真似て（つまり、その人になりきつて）、実際に歌を歌つてみるのも、楽しいことである。それは、どうしてかと言えば、それは、歌を歌うことと自体が、楽しいことであるとともに、その人になりきつて実際に歌つてみることによつてこそ、その歌手が、歌を歌っている時のまさに「心の動き」や「呼吸の仕方」（息づかい）、或いは「なぜ、ここはこういう顔の表情や声の出し方、或いは身振りになるのか」などを、あらためて微妙なところまで、わが身にかけて、実感としてはつきりと理解することができ得るようになるからである。というのも、その人を「外から見ていた」時には、決して分からなかったことが、その人になりきつて生きてみることによつてこそ、その人を「内から観ている」状態となり、その人の「心の動き」やその他などを、まさに「わが身にかけて、実感として感じ取ることができ得るようになる」ということである。

それゆえ、どこまでも厳密かつ徹底した「物まね」（つまり、その人自身になりきつて、その人の「内的世界」を徹底的に生きてみるという方法）こそは、まさに「人間理解の最良の方法」の一つともなり得ているのである。

*

*

健全な「笑い」

健全な「笑い」について

健全な「笑い」というのは、本来、「生の充実感」から生じてくるものである。例えば、赤ちゃんやニコニコ笑っているのは、何も他人の欠点や失敗などを見聞きして、それを笑っているというよりは、(むしろ、そういう場合もあるだろうが)、むしろ安心感や心地よさあるいは生きていること自体が楽しいというような、そういう「生の充実感」から生じて来る場合が多いのだろう。また、夏の海に海水浴などに遊びに行った時に、その波打ち際でキヤーキヤーと言いながら、友だちや波などと戯れながら楽しく笑っているのは、何も他人の失敗や欠点などを見聞きして、それを笑っているというよりは、むしろ自分の体や心を生き生きと躍動させて遊んでいる、その「生の充実感から生じて来る笑い」であり、そのような「笑い」こそ、本来、「健全な笑い」である、ということである。

例えば、子供たちが、かくれんぼや鬼ごっこ、その他の遊びなどで楽しく笑っているのも、何か誰かの欠点や失敗などを見聞きして、それを笑っているというよりも、もちろん、そういう場合もあるだろうが、しかし、本来的には、自分の体や心を生き生きと躍動させて遊んでいる、その「生の充実感」から生じて来るものである。つまり、われわれ人間にとつて、自分の体や心を生き生きと躍動させて生きている、その「生の充実感」から自然と生じて来る「笑い」こそは、本来、「健全な笑い」と呼べるものである。

ところが、今日のわれわれの「笑い」というのは、その多くが「他人の欠点や失敗或いは幼稚さや愚かさ」などを笑うような優越感的な「笑い」になりやすい傾向が強いかと思う。——例えば、おかしくしておかしくて、もう腹を抱えて笑い転げるような笑いがあるとすれば、それは、必ず、何かを犠牲にした上に成り立っている笑いであることが多いのだろう。もちろん、笑いというものが、どうしてもそういう傾向になりやすいのは、ある程度は、仕方がないとしても、そういう傾向が、あまりに強くなり過ぎてしまうと、その笑いを見ている人たちの「心の中」でも、例えば、なにもそこまで言ったり、やったりしなくてもとか、また、何かつまらないことを言ったり、やったりしているなとか、あるいは、ニヤニヤと相手を軽蔑するような笑い、その他、そういう「空虚な笑い」(つまり充実感が伴わない笑い)になりやすい傾向があるかと思う。しかも、そういう「空虚な笑い」(充実感が伴わない笑い)というのは、その時々、楽しい(あるいは気晴らしになる)としても、その人の「心」をほんとうに永続して満たしてくるものではないので、そういうものばかりだと、どうしても「空虚な思い」(満たされない思い)に襲われるとともに、そのような「内容のないもの」ばかりを見聞きしていると、内容がないために「頭の中」にはこれという「確かなもの」が残らず、次第にその人の「頭の中」も「空虚」になってしまい、やがては精神の「白痴化」(或いは「砂漠化」)が進むことにもなりかねないものである。それでは、その「空虚の思い」(つまり「満たされない思い」)を満たすものは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに「内容のあるもの」によってこそ、われわれ人間の「心の中」は、真に満たされることになるということである。

それでは、「内容のあるもの」(ここでは内容のある笑い)とは、いったいどういうものかと問えば、それは、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを巧みにとらえているとともに、一面では「カタルシス」(心の浄化)をも呼び起こすようなものであり、笑わせるばかりではなく、泣かせたり、考えさせるようなところもあると

いうことである。その例としては、例えば、チャップリンの『ムーンライト』や『モダンタイムズ』のようなものは、そういうものになるのだろうし、また、日本では『藤山寛美の新喜劇』や『寅さんシリーズ』などが、あるいはそういう範疇に入るのかも知れない。つまり、演技や内容の面白さとともに、人情の機微などで見ている人たちを泣かせたり、また、ものを考えさせたりするところがあるということである。

*

*

笑わせて

しかも泣かせる

喜劇かな

友情

友情について

例えば、「友情」とは、何かと問えば、それは、お互いの「信頼関係」からなり立っているものである。それゆえ、「友情」というのは本来、「精神的な結びつき」であり、いわゆる「利害や損得あるいは性的関係」などで結びついているものではないということである。そして、そのお互いの「信頼関係」が崩れてしまえば、当然のことながら、お互いの「友情関係」も崩れていくしかないということである。

*

*

まず最初は、すべて「出逢い」から始まり、そして、お互い何度か関わっていくなかで、お互いの「人間性」その他なども少しずつわかり始め、うまくやっていけそうな感じやいやだなあと思うような感じ、また、親しくなれそう感じやそうではない感じ、また、話が合いそうな感じやそうではない感じ、あるいは、人間として信じられそうな感じやそうではない感じ、その他、そのような実に様々な「思いや考え」などが錯綜することになるかと思う。そして、そのような感じから、やがて、親しくなれそうな「友だち」なのか、それともそうではない「友だち」なのかに自然と分かれていくことになり、結果として、親しくなれた「友だち」のなかでも、お互い「信頼関係」がそれなりになり立っている友だちとの間にこそ、いわゆる「友情」というものは、自然と生じて来るということである。そして、実際に何度も何年も親しく関わっていくなかで、その「信頼関係」がより強まれば強まるほど、それだけお互いの「友情関係」も深まり、最終的には、まさに無二の「親友」関係にまで深まっていくということである。

例えば、太宰治の『走れメロス』という作品は、非常に有名であり、それゆえ、細かな説明は、省略しますが、主人公のメロスと身代わりの親友との関係は、まさに無二の「親友」関係であり、それゆえ、お互い相手を信頼しきっている関係であったわけである。そこで、メロスは、三日目の日没までには必ず戻るという約束で、妹の結婚式に参列をし、それも無事に終えて、再び、町へと戻るその途中で、前日から降った雨で、増水した川を必死で泳ぎ切ったり、また、山賊に襲われたりと、いろいろな障害に遭いながらも、やつとの思いで町へと戻って来るわけである。——そこで、メロスは、親友に、一度だけ「親友を裏切るような気持ちに襲われた」ことを告白し、相手の親友も、一度だけ「疑ったことがあった」と告白するわけだが、ここで最も大事なことは、メロスは、「自分を信頼している親友を裏切ろうとしたこと」を恥じ、また、相手の友だちも、「親友を一度でも疑ったこと」を恥じたということである。しかも、暴君も、「人間が信じられないということ」を恥じたということである。これは、一体、どういうことなるのか？ それは、次のようなことである。——つまり、「人間関係」というのは、すべて「信頼関係」から成り立っているものであり、それゆえ、「信頼関係」が崩れてしまえば、すべての「人間関係」も崩れていくしかなく、それは、「友人関係」、「親子関係」、「夫婦関係」、「恋人関係」、「愛人関係」、その他、どのような「人間関係」であっても、すべて同じことである。

*

*

例えば、信じていた人間から裏切られたりした時には、誰でもショックを受けるとともに、そのようなことを何度も繰り返せば、もう人間そのものが信じられなくなると、最終的には「人間不信」や「人間嫌い」になってしまう可能性が高いということである。つまり、

「人間関係」の結びつきとは、結局は、相手が信じられるか、信じられないかの問題であり、相手がまったく信じられなければ、お互いの「関係」も成り立たないものであり、相手がある程度信じられると思えるからこそ、相手との「関係」も生じて来るということであり、それゆえ、相手の人間がどこまで信じられるかにほぼ正比例して、相手との「人間関係」もそれに見合った関係になっていくものである。——もちろん、人間を盲目的に信じることは、危険なことであるし、逆に、人間がまったく信じられなければ、そもそも「人間関係」そのものが成り立たないということである。それゆえ、われわれ人間というのは、実に様々な人間との「実際の関わり」のなかで、ああでもないこうでもないという前述のような実に様々な「思いや考え」などが錯綜するなかで、やがて、相手の人間との関係も、それに見合ったような関係になっていくということである。

最後に、「友情」とは、いったいどういうものかと問えば、それは、まさに「友との情」であり、その「友との情」というのは、例えば、一緒にいて楽しいという「情」であり、また、お互い気が合うという「情」であり、また、相手がそれなりに信じられるという「情」であり、また、何かの時には、助けたり助けられたりするという「情」であり、また、親しく心を通わすことができるという「情」であり、また、何かがあれば、気軽に相談し合えるという「情」であり、また、一緒に旅行に行ったり、一緒に寝泊まりすることもできるといふ「情」であり、また、お互い相手をそれなりに理解し合えているという「情」であり、また、何かがあれば、真つ先に駆けつけるといふ「情」でもあるということである。もちろん、その他、いろいろあるかと思うが、大事なことは、お互いの「信頼関係」がしっかりとできていくからこそ、お互い気兼ねなく気楽に付き合うこともできるし、また、心を割っていろいろと話をすることもできるといふことである。

*

*

信頼こそ、

仲を保つ

秘訣かな

自信

自信について

例えば、「自信」というのは、その人の「心の中」に、その人にとって「自信」となり得るに必要な量の「確かな手応えと実績」とが降り積もることによってこそ、初めて、いわゆる「自信」というものを持つことができ得るようになることである。これが、最も「根底的な自信」になることである。もちろん、それに加えて、他人からの高い評価や賞賛、また、声援、応援、励まし、激励、あるいは支援（支持）者や理解者、その他などに恵まれることによって、さらなる「自信」につながるということである。逆に、他人からの低い評価や酷評、また、無視、非難、嘲笑（あざけり）、あるいは支援（支持）者や理解者、その他などにあまり恵まれない、孤立無援、その他である場合には、どうしてもその人の「根底的な自信」というものも揺らぎやすく、また、「自信」というものは、なかなか持てないということにもなりやすいということである。

もちろん、自分に絶対的な「自信」が持てているような場合には、他人からどのような評価を受けようが、そのようなことによって、自分の絶対的な「自信」というものが、揺らぐということはないのかも知れないが、それこそは、まさに絶対的な「確信」であり、その絶対的な「確信」というのは、いわゆる絶対的な「自信」よりも、さらに深いものであり、それゆえ、何を以ってしても、絶対に「揺らぐことがない」というものである。――例えば、ガリレオは、自分で製作した「望遠鏡」を使つて、様々な「天体」を可能な限り厳密かつ徹底的に「観測」していくうちに、いわゆる「天動説」よりも、むしろ「地動説」の考え方のほうが、遙かに正しいという「確信」を得るわけである。そこで、そのことを記した『天体対話』という書物を公刊すると、翌年、異端審問所で「裁判」にかかれ、その内容が「聖書に反する」という判決を受けて、七〇歳のガリレオは、結果として、「終身禁固刑」に服することになるが、その異端審問所を出る時に、ガリレオは、いわゆる「……それでもそれ（地球）は動く」という非常に有名な言葉をつぶやくことになるわけである、それこそは、まさに絶対的な「確信」であり、まさに何を以ってしても、絶対に「揺らぐことがない」ものになるのである。

*

*

それゆえ、「自信」にも、それぞれの「段階」があり、一つは、「自信」が持てない（〇〜二〇％）があり、一つは、あまり「自信」がない（二〇〜四〇％）があり、一つは、それなりの「自信」（四〇〜六〇％）があり、一つは、かなりの「自信」（六〇〜八〇％）があり、一つは、非常に強い「自信」（八〇〜九〇％）があり、そして、最後に、いわゆる絶対的な「自信」（九〇〜九九％）があり、その極みに、絶対的な「確信」（一〇〇％）があるということである。例えば、自分の「容姿・容貌」には、あまり「自信」がないとか、また、「運動能力」には、それなりの「自信」があるとか、また、自分の「料理の腕」には、かなりの「自信」があるとか、或いはまた、「クルマの運転」には、絶対的な「自信」があるとか、その他、そのようなことになるということである。

そして、「自信」というのは、その人を支えている、いわば一つの「心の主軸」であり、その「心の主軸」というものを失うことは、どうしても「精神的な安定が揺らぎ、様々な不安や悩みなどに襲われる」ことも多くなるかと思うが、それでは、そのような時には、いったいどうしたらよいのかと問えば、それは、結局、最初からやり直すしかなく、最初か

らやり直してみて、その人の「心の中」に、再び、その人にとって「自信」となり得るに必要な量の「確かな手応えと実績」とを降り積もらせることによって、再度、「自信」を取り戻すという「方法」を採るしかないのである。そして、そのようなことを何度も繰り返しながら、最究極的には、いわゆる絶対的な「自信」（九〇〜九九％）の持てるようなところまで、さらには、その極みの絶対的な「確信」（百％）にまで、自分自身をどこまでも「高めていく」ということである。

そして、その「最究極地点」こそは、まさに「自己完成」という地点にほかならないというのである。

*

*

手応へと

実績重ねて

自信かな

漫画の魅力

漫画の魅力

例えば、漫画というのは、まさにワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」からできていて、それを読む読者が、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で、そのワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」を自然とつなぎ合わせて、いわば「映像の流れ」のようにして内容を理解して行くというものである。そして、漫画の最大の特徴というのは、特に「強調したい場面」、あるいは「決定的瞬間」などを、まさに極めて大きな「アップ画面」で、いわば大迫力の「激写」風に表現することによって、読む人に極めて鮮明な「衝撃」を与えることができ得ることである。それに加えて、様々なキャラクターの魅力や面白さ或いは色彩の鮮やかさや美しさ、その他、それらが漫画の最大の特徴であるとともに、漫画の最大の「武器」でもあるということである。なぜなら、読む人が受けるその極めて鮮明な「衝撃」こそは、まさに極めて「強力な印象」になるとともに、まさに「たまらない魅力」にもなっていくからである。

つまり、漫画というのは、一般的に、どこか大げさなところがあり、また、現実にはふつうあり得ないようなこと、例えば、イヌやネコ或いは他の動物や植物、時には、人工物までが、まるで人間のように平気で言葉をしゃべったり、また、われわれ人間と対等に会話をしたりしているとともに、凄まじいまでの決闘シーンや超人的な諸能力、その他、もちろん、そのようなことは、現実には絶対にあり得ないようなことでありながら、漫画のなかでは、それらに何の違和感も感ぜず、また、何の矛盾も感ぜずに平気で読んでいられるのは、一体、なぜなのかと問えば、それは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさであり、われわれ「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次元的思考」が平気ででき得るということである。——例えば、過去、現在、未来というまさに「時空」を、あつという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を持ち合わせていて、どのような時代、どのような場所、あるいは、どのような人間、動植物、恐竜、自然、宇宙、その他、何にでも、あつという間に会ったりでき得るのである。例えば、宇宙空間を自由自在に行き来できるのをはじめ、恐竜がいた時代、古代エジプトのピラミッド時代、その他の、ありとあらゆる時代とあらゆる場所、また、未来社会のありとあらゆる場所とあらゆる空間、その他、その人が「空想や想像」の翼を拡げさえすれば、あつという間に自由自在に行き来ができるということである。

つまり、「漫画」や「アニメ」というのは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさ、その現実を遙かに超越した「超次元的思考」の、あるがままの正直な「空想や想像の産物」の「一つの表現形式」になるということである。つまり、その人の実に多種多様な「空想や想像」（或いは「夢」）、その他は、いわゆる「漫画」や「アニメ」という形式でこそ、まさに思う存分に表現でき得るということである。そのように「漫画」や「アニメ」という表現方法によって、この世のありとあらゆる内容のものを表現でき得るかと思うが、しかし、漫画だけを唯一の「教科書」のように読んで、現実に則した内容の「新聞、雑誌、書物、その他」などを全く読まないとすれば、それには、やはり「大きな問題」があるということである。その最大のもの、「漫画の世界」というものは、そもそも「空想や想像力」などを元としたどこか現実から遊離した感じの内容になりやすいたとも、いわゆる「内容そのもの」も現実に則した「厳密さや正確さ」

などには欠けるところがあるのである。——つまり、「漫画」というのは、どうしてもその人の「空想や想像力」などから生み出されることが多く、一方の「新聞、雑誌、書物、その他」などは、どちらかと言えば、現実に則した思考を行なっているものであり、それゆえ、現実に則した「内容の正確さや厳密さ」などがどうしても強く要求されるものであるが、「漫画の世界」では、たとえどのような訳の分からない内容でも許されてしまうというところがあり、そこに「漫画の世界」と「現実の世界」との決定的な違いがあるということがある。

例えば、「新聞、雑誌、書物、その他」などの世界では、基本的には、現実に則した「正確な理解」や「厳密な思考」などが、どうしても強く要求されるものであるが、一方の「漫画の世界」というのは、われわれ「人間の脳」が持ち合わせている「空想（想像）能力」の素晴らしさ、その現実を遙かに超越した「超次元的思考」を元として生み出されることが多い世界であり、それゆえ、現実に則した「正確な理解」や「厳密な思考」などは、ことさらに強く要求されるということのない世界であるとともに、「漫画」を生み出す「思考方法」で、実に多種多様な「空想（想像）の世界」を生み出すことはでき得ても、現実の実に様々な問題に直面した時に、それは、自分のことであれ、他人のことであれ、あるいは社会や国家のことであれ、それらの問題を現実に則して解決していくという厳密な「思考（思索）能力」というものは、育ちにくく、どうしても「空想（想像）の世界」（つまり「仮想の世界」）に遊ぶような傾向になりやすく、漫画だけを唯一の「教科書」のように読んで、現実に則した内容の「新聞、雑誌、書物、その他」などを全く読まないとするば、現実に則した厳密な「思考（思索）能力」というものは、育ちにくくなってしまおうという、そういう「大きな問題」が生じて来るということである。

それゆえ、「漫画」だけを好んで読むだけではなく、ほかの「新聞、雑誌、書物、その他」なども合わせて読むことによつてこそ、人間としてバランスの取れた「思考（思索）能力」が健全に育つことになるというのが、ここでのまさに結論になるのである。

*

*

ちなみに、「漫画の世界」を「実写版」で「映画」や「テレビドラマ」などにすることも多いかと思うが、その場合、成功する確率の高いのは、例えば、「ラブコメ」や「現実に沿った内容の漫画」であることが多く、その最大の理由は、「漫画の世界」と「実写の世界」との間に、それほど決定的な「違い」（ズレ）を感じないで済むからであり、一方、例えば、「ドラゴンボール」や「北斗の拳」、或いは、「機動戦士ガンダム」や「ワンピース」、その他などを「実写」にするとなれば、それは、やはりなかなか難しいことになるのだろう。——確かに、「スーパーマン」や「バットマン」、或いは、「スパイダーマン」などは、「実写」として大成功しているのかも知れないが、ただ、ここで言いたいことは、次のようなことである。——つまり、「漫画の世界」と「現実の世界」との間に、それこそ、まさに決定的な「違い」（ズレ）が感じられるようなものは、それを「実写」にすることは、なかなか難しく、その最大の理由としては、そのような「漫画」は、まさに現実を遙かに超越した「超次元的思考」を元として生み出された「空想（想像）の世界」（つまり「仮想の世界」）の「漫画」であるがために、「漫画の世界」と「実写の世界」との間には、あまりにも決定的な「違い」（つまりズレ）があり過ぎて、どうしても違和感を感じてしまうという理由によるのである。

また、昔の「映画」や「ドラマ」というのは、多くの場合、主人公やヒロインたちで
きるだけ魅力的でカッコいい台詞セリフなどを言わせて、誰もが心惹ひかれるような理想的な役を
演じていたかと思うが、今はそのような主人公やヒロインたちは、一体、どこへ行ってし
まったのかと敢えて問えば、それは、実は「漫画」や「アニメ」の主人公やヒロインとし
て、華々はなはなしく甦よみがえっているのであり、しかも、今や「映画」や「テレビドラマ」などは、
その人気を失い、一方、「漫画」や「アニメ」こそは、まさにその「全盛期」になっ
てきているのである。

*

*

「参考文献」

※ 底本「変身他一篇」（カフカ作・山下肇訳）（「岩波文庫」）